

最強ミミックに転生したので、とり

あえず新性を愉しむことにしました

……俺の名前は工藤浩太という。前世は人間で、現世はミミック。いまは薄暗い洞窟の中で暮らしているところだ。え、なにを言っているのか理解できないって？ うん、俺も自分で言ってるおかしいと思う。いや、本当に。でも、言っていることに嘘偽りはないんだ。だって、全部真実なんだから。だからとりあえず、どうしてこうなってしまったのかをまず話したいと思う。

前世での俺は、社会の最底辺に生息するフリーターだった。別に好きでフリーターになったわけじゃない。本当は良い所の企業に勤めたかったし、安定した生活を送って結婚もしたかった。でも、できなかった。俺はいわゆる就職氷河期と呼ばれる世代の出身で、大学を卒業した時、世間は不況の真っ最中だった。百を超える企業に履歴書を送っても、面接までたどり着ける会社は極わずか。しかも受からずお祈り通知ばかり送られてくる。それでもやつとの思いで中小企業に入ることができたのだが、入社して半年後、就職先は呆気なく倒産してしまった。

それから先に待っていたのは、絵に描いたような転落人生だった。

再就職先は見つからず、派遣とアルバイトで食いつなぐ日々。年収が三〇〇万円を超えたことは一度もなく、鬱病を患った年は一〇〇万円代まで落ちたことすらあった。貯金の残高はいつもゼロ。給料日の前日には食料が無いこともしばしばで、飢えを凌ぐため公園に生えているつくしやタンポポを食べたことだってある。生活の足しにと思って同人誌なんかも描いてみたりしたが、結局、大して売れなかった。日本という国は、一度でもレールから外

れると立ち直れないと言われているが、それは本当のことだと思い知らされた。いや、本当に。

一度、思いつめて生活保護を申請してみたが、受付の公務員に「まだ若いんだから働けるでしょ」と説教をされて諦めた。まあ、確かに、派遣やアルバイトで働けてはいるんだけど、その生活はワーキングプアそのもので、屋根があるだけのホームレスと変わらない。親はすでに他界しているし、兄弟も姉妹も友だちもない現状では、誰にも頼ることができなかった。

それでも、死にたくは無かったから、働くしかなかった。

生きるためには金がいる。金を得るためには、働くしかない。世の中には、指すら動かさず、金を働かせて金を得ている人間がごまんといえるらしいが、俺には関係の無い話だ。金が無い俺が金を得るための手段はたったのひとつ。自分の身体を使って働いて稼ぐしかないのだ。

だから俺は、その日も、超大型の強い台風が迫っている最中、自転車でアルバイト先に出勤して、その道中、雷の直撃を受けて死んでしまった。享年四二。まともな職歴もない、童貞アラフォーの、呆気ないこれが最後だった。

（ああ、俺の人生、これで終わりなのか……）

薄れゆく意識の中、俺は自分の人生を振り返った。

何も良いことがない人生だった。

ただただ、苦労しただけの、悲惨で無惨な生涯だった。

（ああ、惨めな人生だったなあ……）

そう思い、心の中で涙した。

だが、その時だった。

自分の意識が、まるで蠟燭の最後の灯火のように消えようとしていたまさにその瞬間、その刹那、自分の頭の中に、よく聞こえる澄んだ声が、はつきりとした言葉として、頭の中に、意識の芯の根幹に、割り込むようにして響いてきたのである。

『あ、悪い悪い、ちよつと間違えて雷落して殺しちゃった。ごめんな(笑)』
悪びる様子も無い、もの凄く軽い調子の言葉だった。遅刻しておいてへらへらと笑いながら謝るチャラ男のような、人の大事な物を勝手に捨ておいて悪びれる様子のない女のような、そんな喋り方だった。

その悪びれる様子もない軽い調子の言葉が、さらにその調子で、言葉を続けた。

『ま、そのお詫びといっちゃなんだけど、君に第二の人生をプレゼントしよう。しかもこんなクソみたいな世界じゃなくて、もつとアグレッシブな別世界での人生をさ。ハッピーで、ヒッピーで、モッピーみたいな、最高でキュートでフォーな世界に転生させてあげるよお(笑)』

声の主が何を言っているのか、この時、俺はさっぱり理解できなかった。いや、たぶん、誰が聞いても理解できないと思う。いや、本当に。

しかし、頭の中に響く声の主は、俺のことなどお構いなしといった様子で、一方的に話を続けていた。

『とりあえず、お詫びの特典として転生レベルは九九九九、攻撃力は九九九九九九、守備力も九九九九九九、速度も魔力も体力も九九九九九九だ。ついでにスキルも九九九九個付与してあげよう。これだけの能力があれば、転生先ではもはや神。チートで無双な新たな人生が送れるぞお。嬉しいだろう。で、その転生先だが――へぶしッ！……あ』

……かくして俺は、気がつくと、人間ではなくミミックになっていた。そう、あの宝箱に擬態して不意打ちを食らわせてくるあのモンスターに。(な、なんで、こんなことに……)

まあ当たり前だが、最初のうちは戸惑った。なんせ、ミミックである。人間どころか、ドラゴンでもなく、オーガでもなく、ゴブリンでもコボルトでもなく、ましてや犬でも猫でもネズミでも、ハチでもハエでもゴキブリ(それは絶対に嫌だが)でもなく、種族から言えば、イカとかタコとかの軟体動

物に近い低級モンスターのミミックに転生してしまったのだ。胴体の他には、目と口と触覚器官である触手以外は何もないミミックにだ。まさか外殻である宝箱が、ヤドカリの貝殻と同じような取り外しが可能な付属品であるとは転生して初めて知ったよ。

(ま、マジで……本当にこれからどうすりゃいいのさ……)

と、転生してから三日ほどは、恐る恐る周囲の様子を伺いつつ、ぐねぐねとした気持ちの悪い自分の触覚器官を眺めつつ、本当に、真剣に悩んだものである。この時ばかりは人生に絶望して本当に自殺しようかと考えたほどだ。だが、それは過去の話であって、現在は事情が異なる。

いまの俺に、死ぬ気はない。一切ない。

むしろ、俺はミミックに転生したことを喜んですらいた。

なぜならば、俺はいま、ミミックとしての新たな人生を、この薄暗い洞窟の中でモンスターラフを、結構それなりに——いや、かなり愉しんでいるからだ。いやー、人間(もう人間ではないが)、慣れって恐ろしい。

え、なんでミミックとしての生活が愉しいのかって？

じゃあ、ま、とりあえず、順を追って説明してやろう。

俺がいまいる洞窟は、どうやら漫画やアニメやゲームでいうところの「ダンジョン」のような場所で、ここには多種多様なモンスターが生息している。どのモンスターたちも、外見は恐ろしい。だが、ステータスサーチスキルを使用して見たところ、どのモンスターもレベルは一〇から四〇ほどで、特殊能力を持つ個体もおらず、どう考えてもレベル九九九九の俺の敵ではない。しかもこの洞窟、どうやら比較的攻略難易度が低いのか、それとも経験値稼ぎに最適なのか、毎日のようにひっきりなしに冒険者がやってくるのだ。しかも、その中には、結構美人で若い女の冒険者たちも数多くいるのだ。

まあ、ここまで語れば、後はもう、想像は難しくないだろう。

そう、俺はこの洞窟で、冒険者(若くて美人な女性限定)を相手に、モン

スターライフを満喫している最中なのだ。性的な意味で。

ミミックとしての狩りの要領は、ゲームや漫画と同じと言っていい。宝箱に擬態した状態で獲物が来るのを待ち構え、油断したところを一気に襲いかかる。いや、別に油断していなくても関係ない。何しろ、いまの俺よりも強い冒険者は皆無であり、どうしてもこいつもザコばかりだからだ。だからどんな相手も敵ではないのだが、男の冒険者や、女でもブサイクな奴が来た時は、貝のように宝箱の口を閉じてやり過ごすことにしている。いや、別に倒してもいいのだが、殺すのは気が引けるし、第一、倒しても愉しみが無いからだ。ミミックに転生したとはいえ、元が人間であるゆえに、俺はホモではないし、面食いであるゆえに。

だから、若くて美人な女冒険者がやって来た時だけ、本気を出すようにしている。

最初のうちは捕まえた相手をどのように扱えばいいか戸惑った。そりやそうだ、人間であった時から女には縁がなかったのだから。だが、念願だった童貞を捨て、女性（主に身体）に対する経験値を重ねると、段々と行為も大胆になってきた。

なにしろ、この場所には法律がない。倫理もなければ、道德もない。あるのは弱肉強食の掟だけだ。従って、俺がここで何をしようとも、咎める者は誰もいないのだ。だから、強いモノが弱いモノに対して何をしても、かまわないのだ。

嫌がる女をむりやり抑えつけ、自由を剥奪し、身に着けている衣服や甲冑を剥ぎとり、乳房を揉みしだき、尻を撫でまわし、割れ目を愛撫してから何度も何度も犯しても（それこそ発狂して失神するまで強姦しても）ここでは許されるのである。そう、何しろ俺は、もはや人間ではなく、モンスターのミミックであるからだ。

「いやああああああああああああああああッ！ や、やめて助け

てッ！ お願いだからッ、犯さないでッ！ いや、いやいやいやあああああああああああッッ！ 誰かッ、助けてッ！ お願いッ、犯さないでッ！ い、い、いやあああああああああああああああああああああああッッッ！」

俺に襲われた女たちに共通している点は、悲鳴をあげながら泣き叫ぶことだ。時には許しを乞いながら、あるいは親や恋人の名前を叫びながら、もしくは出来もしない言葉を並べて拒絶の意思を表明しながら、全身で嫌悪しながら泣き叫ぶのだ。そいつらを無理やり犯すことが、いまの俺にとっては至上の愉しみなのである。

え、最低だって？

ありがとう、最高の褒め言葉だ。

なにしろ俺は、もう人間ではなく、ミミックなのだから！

そんなこんなで俺はこの洞窟での生活を満喫し、ここですでに数十人近い女性冒険者を襲い、犯している。いやあ、本当、愉しいったらありやしない。

そして俺は今日も待っている。宝箱に擬態して、女の冒険者がやってくるのを待っているのだ。そしてそいつを打ち負かし、蹴り倒して、犯すために。

そしてまた、俺の前に、ひとりの女がやってきた……。

続きは本編でお愉しみてください。